



The University of Human Environments Academic Repository

学位の種類	博士(看護学)
報告番号	甲第9号
学位記番号	看博第9号
氏名	田島 真智子
授与年月日	令和元年9月21日
学位論文題目	看護学生を対象にした高齢がん患者退院支援のための教育プログラム開発とその検証
審査委員	主査: 小笠原 知枝 副査: 篠崎 恵美子、倉田 節子

論文内容の要旨

I. 研究の背景と目的

高齢がん患者は、がんだけでなく、加齢による健康障害や生活習慣病など様々な疾患を抱えていることから、在宅療養移行の困難を来している。

病棟看護師は、退院支援の役割を担っているが、その認識が低い(原田, 松田, 長畑, 2014)ことから、退院調整看護師との適切な連携がとれず、十分な在宅療養移行支援ができていないことが報告されている。在宅療養移行支援の不十分さは、退院の遅延や再入院を招き(小野ら, 2012)、高齢がん患者の ADL を入院前より低下させ(小川ら, 2007)、退院後の療養に対する不安により退院意欲の減退につながっていることなどが指摘されている(清水ら, 2008)。

看護基礎教育における退院支援に関する実習では、病棟看護師の役割より、退院調整看護師の役割が重視されている(吉田ら, 2014; 久保田ら, 2013; 中田ら, 2013)。また、看護学生に対する緩和ケアに関する教育が十分ではない(種市ら, 2012)ことから、高齢がん患者に焦点を当てた退院支援教育が、看護基礎教育に求められている。

このように看護基礎教育の段階から、高齢がん患者の退院支援教育を強調する必要性が示唆されたが、その前提となる高齢がん患者の、在宅療養移行を困難にしている退院支援に関連する要因と考えられる、退院を困難にしている要因(患者・家族・看護師要因)、長期入院に関与する要因、看護基礎教育上の課題を把握することなどは、明らかにされていない。

看護学生が自発的に学習を継続させるという自律的な動機づけをもつようにすることが、看護基礎教育場面においても重要な課題である(佐藤, 2013)ことから、学習動機づけを高める教育介入が必要であると考えられる。

そこで本研究では、退院を困難にしている要因、長期入院に関与する要因、看護基礎教育上の課題などを、システマティックレビューに基づく質的帰納的分析で明らかにし、その結果に基づき、看護学生を対象にした高齢がん患者退院支援教育介入プログラム(以下プログラム)を開発し、その効果を検証することを目的とした。具体的には以下の4ステップからアプローチする。

II. 【ステップ 1】退院を困難にしている要因、長期入院に関与する要因、看護基礎教育上の課題に関するシステマティックレビューに基づく質的帰納的分析

システマティックレビュー(Greenhalgh, 1997)では、合計29件の文献が抽出され、質的帰納的分析を行った結果、退院を困難にしている要因は、患者・家族・看護師の3要因に分類された。患者要因として、【在宅療養における生活困難】、【サポート不足】、【医療処置困難】、【がんの病状悪化に対する不安】、【現状を理解できていない】の5カテゴリ、家族要因として、【介護力不足】、【病状認識困難や思いのずれ】、【在宅療養における不安】、【医療処置に対する思い】の4カテゴリ、看護師要因として、【退院支援知識不足】、【専門職種間情報共有不足・連携不足・調整不足】、【退院支援実践能力不足】、【情報収集・コミュニケーション不足】、【がんに対する不十分な緩和ケア】の5カテゴリが明らかにされた。

長期入院に関与する要因として、【がんに対する症状緩和が困難】、【日常生活自立困難】、【高齢者の肺炎】、【低アルブミン血症】の4カテゴリが明らかにされた。

看護基礎教育上の課題としては、【高齢がん患者を対象とした退院支援教育不足】、【病棟で看護師が行う退院支援の教育不足】、【退院支援教育不足】、【病棟看護師役割の教育不足】の4カテゴリが明らかにされた。

Ⅲ. 【ステップ2】高齢がん患者の退院支援教育介入プログラムの開発と評価指標の作成

プログラムの開発と、評価指標の作成を目的とした。

1. **プログラムの開発:**プログラムの教育目標は、退院支援の困難性を考慮し、高齢がん患者の退院支援における基礎的な知識の獲得と、高齢がん患者の退院支援における病棟看護師の役割の認識とした。教育内容は、講義Ⅰ・Ⅱと演習Ⅰ・Ⅱから構成した。

具体的には、講義Ⅰでは、高齢がん患者の退院支援への興味、関心を高めるために、退院支援が必要な社会的背景と、入院期間の短縮が患者や家族、退院調整看護師に与えている影響を示すDVDを用い、学生に問題を提起させる。次に、退院が困難になる様子がイメージできるよう、退院を困難にしている要因、長期入院に関与する要因の各カテゴリを用い説明する。

講義Ⅱでは、看護師要因が患者・家族、長期入院に関与する要因に与える影響に着目し、病棟看護師の役割につなげる。

演習Ⅰでは、研究者自作「退院支援に目が向かない看護師と退院に戸惑う高齢がん患者」のDVD視聴に基づき問題を学生各自で提起させ、発表させる。

演習Ⅱでは、役割認識を深めるために、グループワークによる討議、発表を行う。

2. **評価指標の作成:**認知・関心に関する評価として計8項目と自由記載、学習動機づけに関する評価として計12項目で構成した。

具体的には、認知の評価内容はテスト形式とし、①高齢がん患者の退院支援が必要な背景、②退院を困難にしている要因、③退院支援の役割などの5項目で求めた。関心に関する評価内容は、①退院支援への責任、②この研修の必要性、③グループワークへの積極性を4段階で問う3項目の評価と、④講義、グループワーク・発表を通じた学びや感想の記載内容で評価した。

学習動機づけの評価においては、Deci & Ryan(2000)の自己決定理論に基づき、廣森(2006)が作成した、心理的欲求尺度を用いた。この尺度は、自律性・有能性・関係性の欲求を測定する。その内容は、自律性の欲求が、授業の進め方・学習内容が自己決定的な雰囲気かを問う項目、有能性の欲求は、自己による「できた」という達成感や、他者による良い評価、「よく頑張った」という満足感や充実感に関する項目、関係性の欲求は、クラスの雰囲気が、協力し合っているか、学び合うものになっているかなどの、人間関係を問う項目であった。全12項目は「1.全く違う」～「7.全くその通り」の7件法で問う。評価に関しては、プログラム介入前後に行う。

Ⅳ. 【ステップ3】看護学生対象の高齢がん患者退院支援教育介入プログラムに基づく教育介入

の実践

ステップ2で開発した、教育介入プログラムを用い研究者が実施することを目的とした。事前にA大学の領域実習終了後の3年生に、プログラム案内や倫理的配慮を示す用紙を用いて参加を募り14名が希望した。プログラム実施当日、配布した倫理的配慮に基づいて再度説明し、研究協力に同意する学生は同意書に記名するよう説明した。グループワークは、1グループ4～5名で構成され、研修時間は1回90分を3回とし、午前、午後に分け、参加者に確認しながら休憩時間を確保し、プログラムを実施した。

実際の介入は、学習動機づけを高めるため、Deci & Ryan(2000)の自己決定理論に基づいた。講義では参加者の有能性を満たすため、DVD視聴により学生が提起した問題と退院を困難にしている要因を関連させ、次に看護師役割と看護師要因が相反していることを強調し、演習の看護師役割に関する討議が活発になるようつなげた。演習では自律性を満たすため、グループワークにおける各学生の役割や、発表方法などを参加者主体で決定した。有能性や関係性を満たすため、演習の目的を共通認識させ、発表では、修正が必要な場合でも参加者の考えは否定せず、参加者の考えに提案として追加した。発表後の質疑応答や相互評価は、グループメンバーや、他グループの良かった点、改善方法の提案をするよう事前にルールを示すなどを含めた。

V. 【ステップ4】看護学生対象の高齢がん患者退院支援教育介入プログラムの検証

開発されたプログラムの有効性を検証するために、プログラム実践前後にステップ2で作成した評価指標を用いて検証することを目的とした。対象の14名に、介入プログラム実施前後に評価アンケートを行った。プログラム介入前後において、プログラムの配布数各14件、回収数各14件で、有効回答率は介入前後100%であった。

プログラム実施前後の認知、関心、学習動機づけの中央値を比較すると、全て有意な差($p < 0.001$, $p < 0.01$, $p < 0.05$)がみられたこと、そして、自由記述から、高齢がん患者の退院支援における看護師の役割として、患者や家族の不安の表出に努め、その不安を解消するために多職種連携により支援をすることなどの認識が確認された。プログラムに使用した自作のDVDにより、参加者は患者、家族、看護師の言葉だけではなく、姿や表情から、問題を捉えることができていた。以上から教育方法の有効性が確認できた。

VI. 総括

本研究では、退院を困難にしている要因、長期入院に関与する要因、看護基礎教育上の課題をシステマティックレビューに基づく質的帰納的分析で明らかにし、その結果に基づきプログラムを開発し、その有効性を確認した。本研究で開発されたプログラムに基づく、教育介入が普及すれば、看護学生に高齢がん患者における退院支援への意欲が育まれることや、退院支援の視点が養われ、その結果として、看護教育を受けた学生は、臨床でロールモデルとなることが期待される。

プログラムの展開における今後の課題として、以下の3点が挙げられる。

第1には、高齢がん患者の在宅療養移行を困難にしている退院支援に関連した要因を、量的

ではなく質的研究に基づき明らかにした。今後は量的研究も加えたうえで困難要因を明らかにし、本教育介入プログラムの改善を追及していくことである。第 2 には、評価項目数が少ないため、評価指標を再検討する必要がある。第 3 には、プログラムの対象者が少数であったため、今後は対象者を増加し、妥当性の検証を重ね、本プログラムの有効性を高める必要がある。

論文審査の結果の要旨

高齢がん患者の退院支援不足に対して、看護師の教育不足が指摘される現状において、田島さんが、敢えて、看護学生を対象とした背景には、高齢がん患者の退院支援が看護師の役割であることを、まず看護学生のときから認識することが看護教育に携わる教員として重要と考えたからである。

本論文は、4ステップを踏んで丁寧にアプローチしている。

先ず、第1ステップでは、Greenhalgh 理論 (1997)に基づくシステマティックレビューにより得られた退院困難要因に関する 30 文献を質的帰納的に分析した。その結果、患者・家族・看護師の 3 要因に分類された。患者要因として【在宅療養における生活困難】【サポート不足】【医療処置困難】【がんの病状悪化に対する不安】【現状を理解できていない】の 5 カテゴリー、家族要因として【介護力不足】、【病状認識困難や思いのずれ】【在宅療養における不安】【医療処置に対する思い】の 4 カテゴリー、看護師要因として【院支援知識不足】【専門職種間情報共有不足・連携不足・調離不足】【院支援実践能力不足】【情報収集・コミュニケーション不足】【がんに対する不十分な緩和ケア】の 5 カテゴリーを明らかにしている。さらに、患者要因に関与する長期入院要因として、【がんに対する症状緩和が困難】【日常生活自立困難】【高齢者の肺炎】【低アルブミン血症】を明らかにした。これらの諸要因が院支援のための教育プログラムの基礎的資資料になっている。長期間のシステマティック・レビューと質的帰納的分析に基づく要因の明確化は、本論文の根幹になっているところであり、高く評価できる。

第IIステップでは、高齢がん患者の退院支援のための教育介入プログラムを開発し、それを評価するための評価指標を作成した。この教育プログラムの特徴として、第1ステップで示唆された要因を背景にした基的知識の習得を意図した講義内容から構成していること、学習を動機づけるための工夫として、DVD を試作していること、退院支援の必要性を看護師の役割であることを認識させるためにグループワークを取り入れたことなどが挙げられよう。

しかし、プログラムの効果を判定するために用いた評価指標に関して、次の2点が指摘された。その1つは評価指標に作成において、知識習熟度の5評価項目と意欲に関する3評価項目の適切性が問われたことであった。もう一つの指摘は、Deai & Ryan (2000)の自己決定理論に基づき、廣森 (2006)が作成した心理的欲求尺度を、学習動機づけの評価として用いたが、本論文の教育プログラムの評価という観点から適切であったかが疑問視された。

第3ステップでは、開発された高齢がん患者に対する院支援教育介入プログラムを用いて看護学生に教育介入を実施した。領域実習終了後の3年生に参加を募った結果、対象は14名であった。講義I・IIは院支援に関する基礎知識の習得、演習は院支援に関する看護師の役割認識を目標に、時間配分1回90分を3回とし、1日研修の形態で実施した。

最期の第4ステップで、実施した教育介入プログラムの有効性を検証した。プログラム実施前後の3側面(知識・意欲・学習動機づけ)の中央値を比較において、全て有意な差がみられたこと、また自由記述において、高齢がん患者の支援における看護師の役割として、患者や家族の不安の

表出に努め、その不安を解消するため に多職種連携により支援をすることなどを認識していること、また研修に対する満足度は高かったことが確認されている。

以上から、本論文は、看護基礎教育における高齢がん患者への退院支援の必要性を研究動機とし、教育内容を丁寧な質的分析の結果から得られた院困難要因、長期入院に関与する要因などから特定して、教育プログラムを開発している。そして、それを具体的に講義と演習の内容と方法を考案して実施し、最後に、自作と既存尺度を用いた評価指標により、その有用性を確認するという長期間にわたる研究プロセスを踏んだ論文である。

若干、評価指標の適切性、対象学生が少ないこと、教育介入の時期など課題は残っているが、今後、これらの観点から検討してゆくことにより、改善されることが期待される。

本論文で、高齢がん患者のための院支援のための教育プログラムを開発したプロセスは、今後さまざま患者の退院支援プログラムの開発において大いに参考になり、また、教育プログラムの作成とその具体的な実施は、教員の授業設計においても貴重な示唆を与えていることから、教育的意義は高いと評価できる。

以上から、本論文は本学の学位授与要件に則り、博士(看護学)の学位授与に値するものである。

2019年 7月 5日

論文審査委員 主査 教授 小笠原 知枝
副査 教授 篠崎 恵美子
副査 教授 倉田 節子